
魔法少女リリカルなのはRiot

かいじやりすいぎょ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはRiot

【Nコード】

N2568Y

【作者名】

かいじやりすいぎよ

【あらすじ】

「アイツのことをどうしても護りたいんだ」なんて、願ってしまったのが悪かったんだろうか。いや後悔はしてないけどな。願ったのは力、与えられたのは魔法。毎日をなんとなく、楽しく過ごさせていればそれでよかった。けれど、小学三年の春、それまでの平穏は打ち破られた。この手にあるのは護るための力。護るために、俺は戦っていくんだ。／魔法少女リリカルなのはの微革変（いや、大革変に近いかもしれませんが）二次創作です。タグには×××HOLiCとクロスオーバーとですが、10%もありませんから、×××

HOLICを知らなくても問題はありません。なお、縦書きにも対応させました。PCの方で縦書き読みの人が居られたら、ぜひそちらもご購入に。また、かいじりすいぎよが学生なので、更新は不定期です。では、魔法少女リリカルなのはRiote、はじまります。

ブログ代わりの回想(前書き)

すみません。いろいろあって書き直しました。これからはこっちを
更新します。

三日坊主にならないように気をつけますが……

プロローグ代わりの回想

はやてっ！？ はやてー！！

なんでっ！？ どうしてー！！

くそっ！ 俺はっ！ どうしてこんなっ！！

俺は……こんなにも……無力だ……。

護りたいんだっ！ コイツをっ！ はやてをっ！

痛みから、悲しみから、全てから護りたいんだっ！！

” が……欲しいっ！ “力”が欲しい！！
だからっ！ そのために！ そのための“力”をっ！ “力”
が……欲しいっ！ “力”が欲しい！！

その願い、叶えてやるうじゃねえか。

ジジジジジ。ジジジジジ。アラームが喧しく鳴り響く。俺はそれを乱暴に止める。

さきほどまで見ていた夢を思い出し、ため息をついた。始まり……か。あの時、俺たちは始まったんだな。

……まったく、随分と昔のことを思い出しちまったじゃねえか。

《プロローグ代わりの回想》フラッシュバック終了。

そして、物語は十年前へと遡る……

1話 小学校くらいって男子より女子のほうが強いよね。(前書き)

初投稿です。

生暖かい目で見てやってください。

三人称難しい……。

>変更く携帯の方には関係ありませんが、PCの方には縦書きで読むことをおすすめます。紹介文では、対応させたなんて書いてますが、実際は縦書き専用みたくなってます。携帯のほうはうまい具合に改行できているはずですが、どうでしょうか？ 読みにくかったら、ご一報下さい。PCの方は縦書きには右上に変更できるところが……

え？ そんなの知ってる？ や、やだなー、僕も最初から知ってましたよ？ つい最近、気付いたなんて事はないですよ？ もちろん。

1話 小学校くらいって男子より女子のほうが強いよね。

「おい、それはマジで言ってるのか？」

「あたりまえや。こんな体でどうやって学校通うんや？」

車椅子の少女は両手を広げ、自分の身体状態を強調する。

「だからってなあ」

「大丈夫や、今まで通り買い物はしてもらってから、愛しの幼なじみには毎日会えるよ？」

「誰が『愛しの幼なじみ』だよ。この狸！」

「あー！ また狸ってゆうたー」

少年は八神家の玄関で靴を履きながら、そんな捨て台詞を吐きつつ、だいたい俺は年上好みだと何度言ったらわかるんだよ、と内側で毒づく。

少年が戸を開け、玄関を出ると、春休み明けで怠惰な日々を過ごしていた少年を朝日が刺し貫く。ああ、さわやかな朝だ。さわやかすぎて死にそうだ。なんて、どこぞの中学生のようなことを思いながら、足早に去っていくこうとすると、車椅子の少女、八神はやてが後ろから声をかけられた。

「じゃ、行つてらっしゃい、悠斗」

さきほど少年は、年上好み、と自分を称した。けれど、やっぱり同世代の可愛い幼なじみが笑顔でブンブン手を振っている姿は、こう、胸に来るものがあるわけで。

「う、おう、行つてきます。休学だからって本ばっか読んでんじやねえぞ、はやて」

「うあああ！？ 照れてんじやねえよ、俺！」

そんなことで頭を抱えながら、その少年、アイノユウト相野悠斗の新学期、小学3年の春は始まった。

「はい、皆さん。それでは、今年一年お願いしますね」
『お願いしまーす』

幼げな、けれど去年よりは落ち着いてきたであろう声が教室内に響く。

私立聖祥大学付属小学校。それなりに設備の整った大学までエスカレーター式の学校である。もちろん、学費は高く、生徒にもそれなりの学力が要求される。が、悠斗たちはまだ小学生である。まだ、そこまでは厳しくはない。新しい学年、新しいクラスとなり、周りの級友たちも入れ替わる。この時期恒例の自己紹介も滞りなく終わった。

ちなみに、悠斗は今年からの編入生である。以前は公立の小学校にはやてと通っていたが、はやての身体上の事情より融通の利く私立へ彼女が移り、一人では行きたがらない彼女のために一緒に小学校を移ったのだ。

まあ、そのはやては編入してすぐ休学サボッてしまったが。

「相野君、ちよつと」

そして、現在は放課後である。悠斗はがやがやと賑わう教室から退避しようかと思っていると名を呼ばれた。教壇へと級友をかわしながら向かっていき、彼女へまず一言。

「なんでしようか、愛川先生。愛の告白ですか？」

「そ、そんなこと聞いてくる生徒は初めてだわ……」

愛川瞳、3-1のクラス担任である。彼女は悠斗の言葉に動揺している、というか動揺しないほうがおかしい。

「とりあえず、告白ではないわ。残念だけど」

「そうですね……」

「ごらごら。帰ろうとしないの。話はあるんだから」

「僕たちの未来予想図についてですか？」

「……。そうね、取りあえず、この書類の事なんだけど……」

悠斗の歳にそぐわない発言はスルーの方向で行くらしい。新任の相川先生にとってこれは貴重な経験になるに違いない。この先、こんな生徒に出逢うことは無いに違いないのだからうけれど。

渾身の一言をかわされた悠斗は不承不承、言われた通り、転入関連の書類を見る。

「相野君、あなた、ご両親は？ それと、保護者の住所とあなたの住所が違うのだけれど」

「えっと、両親は、仕事で世界中飛び回ってます。ですから、保護者は一応祖父なんですけど、なにしろ老体ですから。今は母さんの友達に面倒みてもらってます」

そういえば、しばらく親父たちと会ってないな、今ごろはどここの国にいるんだろうな、などと破天荒な両親のことを思い浮かべた。

悠斗はこういったことには慣れていいのか、驚いている担任に、ははと愛想笑いをする。

「……そう、わかったわ。ありがとうね」

「はい。では、今度の土曜日にお食事にも」

「どんな小学生だ」

「あて」

こん、と愛川先生のチョップが悠斗の脳天に直撃する。とはいえ、優しい人らしい、全然痛くなさそうだ。

「道を踏み外さないようにね、相野君」

「小学三年生に言うことじゃないと思います」

「君が言うな」

苦笑いしながら、愛川先生は教室を出て行ってしまった。

担任との話を終え、さて、そろそろ帰ろうかな、とランドセルに荷物をまとめたところで、しまった、と悠斗は自分を軽く責める。

小学生にとって転校生とか編入生とかは関係ない。とりあえず、興味のあることに飛びつくだけで。……つまり、簡単に言うと、クラスメイトに包囲されてしまったのである。

「どこから来たの!？」

「誰!？」

「サッカー部に入らねえか？」

「いや、ここは野球部だろ」

「いやいや、魔法少女研究会だろ」

「二番目の奴はなんなんだ!？ 俺の自己紹介聞いてなかったの

!？ 興味なかったの!？ そして、最後の奴は自重しろっ!」

「アツハハハ、おもしろいなあ編入生は」

「お前には負ける。まさか小3でアフロの男子を見るとは思わなかった!」

3 - 1は愉快なクラスらしい。つつこみを入れながら、そう思わずにはいられない悠斗である。

それからしばらくは質問時間コントが続いたが、級友の勢いは止まることを知らず、金髪の子が見かねたのか、わいわいと群れてくる彼らを制してくれたお陰で、悠斗は解放された。ちなみに、級友たちはしたり顔でそれぞれ帰路についていた。とんでもないクラスである。

「悪い、助かった」

「いいのいいの! 困ったときはお互い様ってね」

会話が小学生らしくないな、と悠斗が言つと、それもお互い様ね、と彼女がクスクスと笑った。

で、偶然、その金髪の子とその友達と帰り道が同じだったらしく、四人で帰ることになった。

縁は奇なものだ。

「あ、自己紹介がまだだったわね。じゃ、私からね。私はアリサ。アリサ・バニングスよ。アリサでいいわ」

「わかった。バニングス」

「いや、だから、アリサでいいって」

「オーケー、バニングス」

「……」

アリサから無言の圧力が飛んできたので、悠斗はふざけることを

やめた。なんでも、家が金持ちなせいで（アリサは恥ずかしげも無くそう言いきった）セカンドネームで呼ばれるといろいろと不都合らしい。金持ちの子は大変だ、と感慨深く心うちでつぶやく。

「それで、こっちのヘアバンドの子がずずか」

「月村すずかです。よろしくね、えっと、相野君、でいいのかな」

「ああ、よろしくな月村」

おとなしい感じのする子だ、と悠斗は思った。しかし、アリサが言うには、怒るとものすごく怖いらしい（ついでお金持ちらしい、上流階級間での付き合いでもあるのか？）。まったく想像がつかない……わけではない。はやても普段はあんな感じで明るいのだが、キレた時は半端じゃない。怖い、チヨー怖い。ギリギリと追い詰められていって、気付いたら逃げ場がなくなっている、みたいな感じである。悠斗は思い出して身震いをした。

「で、最後が」

「高町だろ？ さすがに隣の席の子は覚えてるって」

「にやはは、よろしくね」

「おう」

高町なのは。快活そう、が第一印象だった。高町についてもアリサの注釈が付いた。ものすごく“頑固”らしい。心に決めたことは一直線。まったく、男より男らしい。それと、唯一、金銭感覚は俺と同じ。少し安心した。なんかむなしいが。

一通り、紹介が済んだ後はお互いにいろいろ日常会話をしていた。しかし、まあ、女子が三人も揃えば、男子たる悠斗の出番はない訳で。

「でね、そのケーキがね」

「へえ」

「何言ってるの。翠屋のケーキも」

「ほお」

「そうだね、なのはちゃんのところのケーキも美味しいよね」

「はあ」

悠斗、空気と化す。

三人にはれないように、悠斗はため息をついた。

1話 小学校くらいって男子より女子のほうが強いよね。(後書き)

はやてにスポットを当ててみました。細かい動機はあちこちで語っていくことにします。

さて、物語が全く動きませんでしたね。

次回で動きまくるはずですよ。

最後に読了感謝です。

2話 「帰ってきたら、鬼がいた。チヨー怖い」b y悠斗(前書き)

まあ、色々と言りたいですが、とりあえず後書きで。

2話 「帰ってきたら、鬼がいた。チヨー怖い」by悠斗

「ただいまー」

アリサたちと別れた後、少し歩いて俺の家までやっとたどり着いた。ちなみに、あの後はなかなか地獄だった。まーあれだ、ものすごく居心地が悪かった。初対面というのもあるが、男女比1対3では勝てるわけが無い。

「お帰りなさい、悠斗くん」

「ただいま、静さん」

タチバナシスカ

橘静さん。二十代前半の女性で、俺の本質保護者だ。……いや、なんか冷たい言い方をしているが、俺としては、ものすごく頼りにしている大人な女性である。ちなみに交際は小2の時に申し込んだが、

うふふ、あと十年経ったらね。

と、簡単にごまかされてしまった。というわけで、今俺はその約束の十年後を待つばかりである。

ちなみに彼女は小説家である。

原稿でも書いていたのか、ダイニングテーブルで、静さんはノートパソコンのキーボードを叩いている。と、不意に顔をこちらに向けて、にこやかな、ものすごく楽しそうな笑顔でこう伝えてきた。「今日はどうしてアクエリアスを連れて行かなかったの？ 拗ねてたよー」

……………あつ！

「ああつ！ 忘れてた！」

うあああ、やばい。説教来るか？

「怒つてたよー、『ユウトはいつもいつも!』って」

「楽しそうですね……」

「たのしーよ、人事だもん。まあ、ネタは勝手に悠斗くんたちから搾り取ってるから感謝してるけど」

「うふふ、と笑う静さん。くそう、可愛いから何も言い返せないっ!

静さんの言う「ネタ」とは、つまり、小説のアイデアだ。静さんは基本、ミステリーとか文学系の小説を書くのだけど、たまにSFも書いたりするので、そういうときには俺たちは格好の「ネタ」になるらしい。

「まっ、いい事あるさー」

「じゃあ今度デートに」

「ちようど良かったー、食料品買い込みたかったんだー。よろしくねー」

「うぐ。利用されてるぞ、俺。というか、小学三年生に荷物持ちさせる気なのか、この子悪魔さんは。」

出来れば、部屋に戻りたくないのだけど、着替えておいでー、との静さんによる刑の強制執行により、部屋に戻る事になった。

頑張つてねー、との静さんの楽しそうな声を聞きながら二階にある自室へと、逃げ出したい気持ちと葛藤しながら向かう。

まあ、いわゆる同居人ではあるのだが、ちよつと普通ではないわけ。

もちろんペットとかでもなく、むしろ最近では相棒兼教育者の様相をみせているせいで、口うるさい。そのくせ、すぐ拗ねる。面倒くさいやつである。

そうこうしているうちにドアの前までたどり着いてしまった。スーハー、と大きく深呼吸をし、よし、とつぶやいてからドアノブを回して、部屋へ入った。

『Welcome home・Master・How was the school?』

「う、そんなに怒るなよ。ちょっと忘れてただけだつて」

『A little? It is a person foolish as ever.』

「え、なんて？ 英語わかんないんだけど」

『ちつ、This is why "YUTORI" is no use.』

「今、日本語混ざつたよね？ ていうかもすごく嫌味なこと言われた気が」

『おかえりなさい、マスター。学校はどうでしたか？ ちょっと相変わらず、間抜けな方ですね。ちつ、これだから「YUTORI」は使えないんです、と言いました』

「よし、ちよつと話し合おうか」

帰ってきた途端にもものすごい罵声を浴びせられた。軽く挫けそうになった。

部屋は静さんが買ってきたシンプルなカーテンや使い勝手のいい学習機がある。後は、俺の趣味のクラシックのCDとかで溢れている。ゲームハードも欲しいっちゃ欲しいのだけど、いかんせん値段が高い。俺の収入ではまったく足りなかつたりする。

『ちよつと、聞いてるんですか、ユウト』

「ああ、聞いてるつて」

そして、この声の発生源は机の上にある、一つの徽章^{バッジ}。もらい物なので、元の持ち主から言わせれば、『今はエンブレム』らしい。意味不明な言葉はいまだに理解できそうに無い。

ところで、バッジがしゃべるわけがないのは自然の摂理である。というか無機物がしゃべるなんてありえないことだ。しかし、俺のアクエリアスはちよつと例外なわけだ。

『魔導師がデバイスを持っていかないでどうするんですか！』
「うう、すまん」

と、いうわけである。

俺はただの小学三年生、且つ、時空管理局に勤める次元駐在人、魔導師だったりするのだ。

ちなみに、少し早めの厨二病なんかではない。決してない。

さて、ここで少し俺と静さん、管理局の間柄について色々と注釈をはさめていこうかと思う。

俺はもともと、第97管理外世界、現地呼称「地球」の生まれではあるのだけど、生まれつきちょっと特殊な力があつた。が、それが俺と管理局を結びつけたわけではない。

きっかけは三年前だが、面倒なので省略。そのときに出会った人物からアクエリアスを渡され、そこが俺の魔導師としてのスタートになった。

ちなみにアクエリアスはどんな形かというと、蹄鉄に近いと言ったらわかるだろうか。もつと末広がり、角張っていて、U字型の蹄鉄の内側、つまり何も無いはずのところに、蒼い宝石がはめ込まれている、というより、その宝石の形に合わせて蹄鉄型の縁が作られているような感じだ。そして、その宝石の中央に十字架っぽいよくわからない紋様がある。

さて、話を戻そう。

そんなこんなでマジカルパワーを手に入れ、アクエリアスに鍛えられる日々だったが、ある日、アクエリアスと魔法の練習中の俺の部屋に静さんが突然登場（ちなみにこの頃から親父たちは世界を駆けずり回っていた）。で、小説家特有の好奇心から質問攻めに遭い、結局、事実を吐露した。

とりあえず、黙ってもらっておくことにはしたが、時々、魔法について質問されることがある。それがSF小説のネタになっているらしい。

その後、ちょっとした事件で管理局の存在を知り、そして管理局に俺の存在を知られ、この世界を義務教育やらなんやらでこの世界

を離れられない俺を本局運用部のレティ・ロウラン提督が『次元駐在人』という特別枠に入れ、入局させた。それからちよくちよくとバイトがあつて、俺は八歳にして初給料をもらうことになった。静さんは、

どうするかは、悠斗くんが決めるといいよ。

とのことだったので、居候として少しばかり橘家の収入を援助することになった次第だ。

ちなみに、静さんと母さんは歳は十歳ほど離れている。母さんが学生時代に近所だったことで知り合い、妹のように可愛がつていたらしい。

とまあ、昔のこととか現状とかを再認識するという現実エスケープ離脱をしていると、アクエリアスの説教が終わった。そして、言葉の調子を変えて話し出した。

『本局からは連絡がありませんが、今日の十時ごろ、この世界にいくつかの魔力反応が見つかりました』

「お、バイトか？」

このあたりでは珍しい魔法関連の事件。その処理が俺の仕事だ。珍しいが故に、俺の収入はあまり多くない。首をつっこめる分はつつこんどかないと損だ。危なくない程度に、だが。

『まだ局からは連絡がありませんが一応見に行っておきますか？』

「そうだな、どうせ暇だし」

『わかりました。では海鳴臨海公園に行きましょう』

俺は制服を脱ぎ捨て、私服に着替え、海鳴臨海公園へと向かった。

2話 「帰ってきたら、鬼がいた。チヨー怖い」by悠斗（後書き）

はい、すみません。情報の奔流回でした。

平たく言えば、最初から、主人公「魔導師」という設定です。

レティさん、二期のあの人は。勘の鋭い方ならなぜリンディでなく、彼女の部下にしたのかわかるはずです。

さて、説明の補足ですが、悠斗は次元駐在人です。その仕事は、管理外世界においてごくたまに発生する魔法関連の事故事件を気付かれないように処理することです。オリジナル設定ですから、ちょっと無理がある気がします。

気付かれないように、と言う部分、要チェックです。まる。

むう、何を話してもネタばれになる。むずかしいですね。

あ、ちなみに、Mr・G事件としてますが、実質はジュエルシード関連の事件、つまり無印の話です。

さて、わかりやすい伏線ばかり張った気がします、今日はここで読了感謝、かいじやりすいぎよでした。

3話 それは不思議な出会いなの？（前書き）

説明回です。

3話 それは不思議な出会いなの？

「……おはよー、すずかちゃん、アリサちゃん」

「お、おはよう、なのは」

「おはよう、なのはちゃん」

なのはです。新学期も始まって一週間が経って、新しいクラスになっただけ、私達仲良しの三人は相変わらずです。

「おい、高町」

「アリサちゃん、宿題ちよつと見せて」

「算数の第五問でしょ？ 私でさえちよつと悩んだわー」

アリサちゃんは普段から「小学校のテストなんて満点で当たり前よ」なんて言うほど成績優秀で。算数だけはアリサちゃんと渡り合える唯一の教科だったりする。普段は仲良し大親友の友達だけど、算数のテストでは友達と書いてライバルと言う関係。ちなみにすずかちゃんはと言うと

「いいよね、二人は算数が出来て、私なんか」

『いやいやいや、他全部出来る子に言われたくないよ（わ）！』

「ほえ？」

すずかちゃんは算数はちよつと苦手だけど、他全部（体育を含めて）出来る万能人だったりして、私的にはものすごくうらやましい子なんです。

「おい、アリサー？」

私たちは今バスに乗って小学校へ向かっています。窓の外には海鳴の海がマリンスブルーに輝いていて、ついこの間まで寒かったことが嘘みたい。

「（でき、なのは。この子、どうしちゃったのよ？）」

「（うーん、私も知らないよ。さっき見たときものすごく驚いちゃったんだけど）」

「（とりあえず見なかった方向で行きましょう）」

「いや、聞こえてるんだが！　なあ、この状況にツツコミ入れようぜ？　おかしいだろ？　なあ、おかしいよな？」

さつきから聞こえてきていた男の子の声にようやく私とアリサちゃん
が反応して、その発生源に目を向ける。

「え？　何がおかしいの？　悠斗くん？」

『いやいやいや、すずか（月村）ちゃんのことだよ！』

「ええ！？」

「いや、そんなマス○さんみたいな驚き方はいいから」

相野くんにぴったりくつついて腕まで組んでるすずかちゃんが自分
分はなにもわからない、という表情をしてる。というか、さりげなく
下の名前呼んでるよ、この子。

相野くんは相野くんで、ものすごく困った、けどコレはしょうがない
みたいなのよ、悠斗。何かあったのかな。

「どうしたのよ、悠斗。ものすごく困った、けどコレはしょうがない、
みたいな表情して」

『読心術！？』

な、なんか思ってたことそのものずばりと言いついてられたよ！？
というか、相野くんがわかりやすすぎるのかも。

結局、なんでそうなったのかはわからずじまいで、学校について
しまい、悠斗くんは友達の前に入って……行こうとして、すずかち
やんにクラスでもつかまっています。

なんて、普通の小学三年生の私、高町なのはですが、最近ちょっと
と事情が変わってて。

「《なのは！　なのは！　助けて、なのは！　美由紀さんが！

美由紀さんってうわあああ……》」

「《ユーノくん！？》」

『《哀れです、駄フェレット》』

「《ちよっと、レイジングハート！？　そんなこと言っちゃダメ

！》」

えっと、魔法少女、やっています。

「じゃ、この問題わかる人〜」

三時間目、国語の授業。

「はいっ」

「……はい、相野くん」

「なんで嫌そうな顔するんですか!」

「いつも君がそうやって愛を囁いてくるからでしょう」

「当たり前です! 瞳さんに愛を囁かずして誰に囁くんですか?」

「瞳先生ね。……さっきからあなたにくつついてる月村さんに囁けばいいじゃない」

「えっとですね、そこは、清少納言です」

「問題は『儂い』の読み方よ。平安のエッセイストの話はしてないわ」

あはははは、とクラスで笑いが起こった。瞳先生と相野くんのコソトは（瞳先生は否定するけど）だんだん定番になってきている。最初の頃は瞳先生も驚いていたんだけど、最近はかわし方を覚えてきたみたい。

すずかちゃんは相変わらずくつついたまま。クラスメイトも放置することに決めたらしい。私もそのうちの一人。

それ以外にも考えなきやいけないことがあった、というのもある。

「《だ、だから、ジュエルシード探しは僕だけで、ってぎゃー》」

「《お姉ちゃん。ユーノくんを可愛がりすぎなの》」

『《駄フエ》』

「《めっ!》」

「《ふう、どうにか逃げ切った。……さっきも言いかけたけど、

ジユエルシード探しは》」

「《ダメ、ユーノくん、まだ怪我治ってないんでしょ?》」

「《う、ま、まあ、そうだけど、やっぱりジユエルシード探しは危ないし》」

「《危ないのは私もユーノくんも一緒だよ。だから手伝わせて、私の力がユーノくんの助けになるなら力になりたいの》」

「《なのは……》」

「《そうですね、駄……前使用者さん。マスターの資質には目を見張るものがあります。失礼ですが、あなたの何倍もの才能をマスターは秘めています》」

「《失礼ですが、って今さらだな》」

「《私には才能なんて……》」

ジユエルシード。魔力を秘めた青い宝石。触ったものの願いを叶える石だけど、同時にとても危ないものでもあって。そんなものが私のうちのご近所に二十一個もばら撒かれてしまっているらしい。

もともとそれを見つけたのはユーノくん、それを安全なところまで運ぼうとして、途中でじげんせんってというのが事故にあってしまったのが原因。

それを、発見者として確保しようとしたユーノくんもジユエルシードを封印しようとして大怪我。それを私とアリサちゃん、すずちゃんと相野くんが帰り道の途中で見つけて、動物病院まで連れて行ったんだけど、その夜、不思議な声（今思えばユーノくんの声だった）に導かれて、動物病院に行つて、そして私は魔法とであった。そのとき、なんとか封印したジユエルシード・シリアル??は今は、魔法使いのデバイス、レイジングハートの中に入ってる。

自慢をするわけじゃないけど、もし、あの時私が駆けつけなかったら、ユーノくんはかなり危なかった。だからこそ……

「《お願いユーノくん、私に手伝わせて!》」

「《……うん、わかった。でも、無理はしないでね、なのは》」

「《うん!》」

「《それに……ってひいっ》」

あははー、もうユーノくんにとってお姉ちゃんは恐怖対象なんだね。

念話を切れてしまったから、授業へと意識を集中する。

「それに私は彼氏が！」

「嘘ですね。彼氏がいるなら、僕に言い寄られて、時々うれしそうな顔をするわけ無いですし」

「わ、私、嬉しそうになんてしてないもん」

……なんか、瞳先生が追い詰められてた。瞳先生、頬染めながら言っても説得力ないなの。というか、瞳先生可愛すぎるよ、うん。

ユーノくんを助けたい一心で決めた「ユーノくんのお手伝い」。これが、私の、私たちのはじまりでした。

3話 それは不思議な出会いなの？（後書き）

すみません。 つぎも状況把握回です。 短くなると思いますが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2568y/>

魔法少女リリカルなのはRiot

2011年11月20日19時22分発行